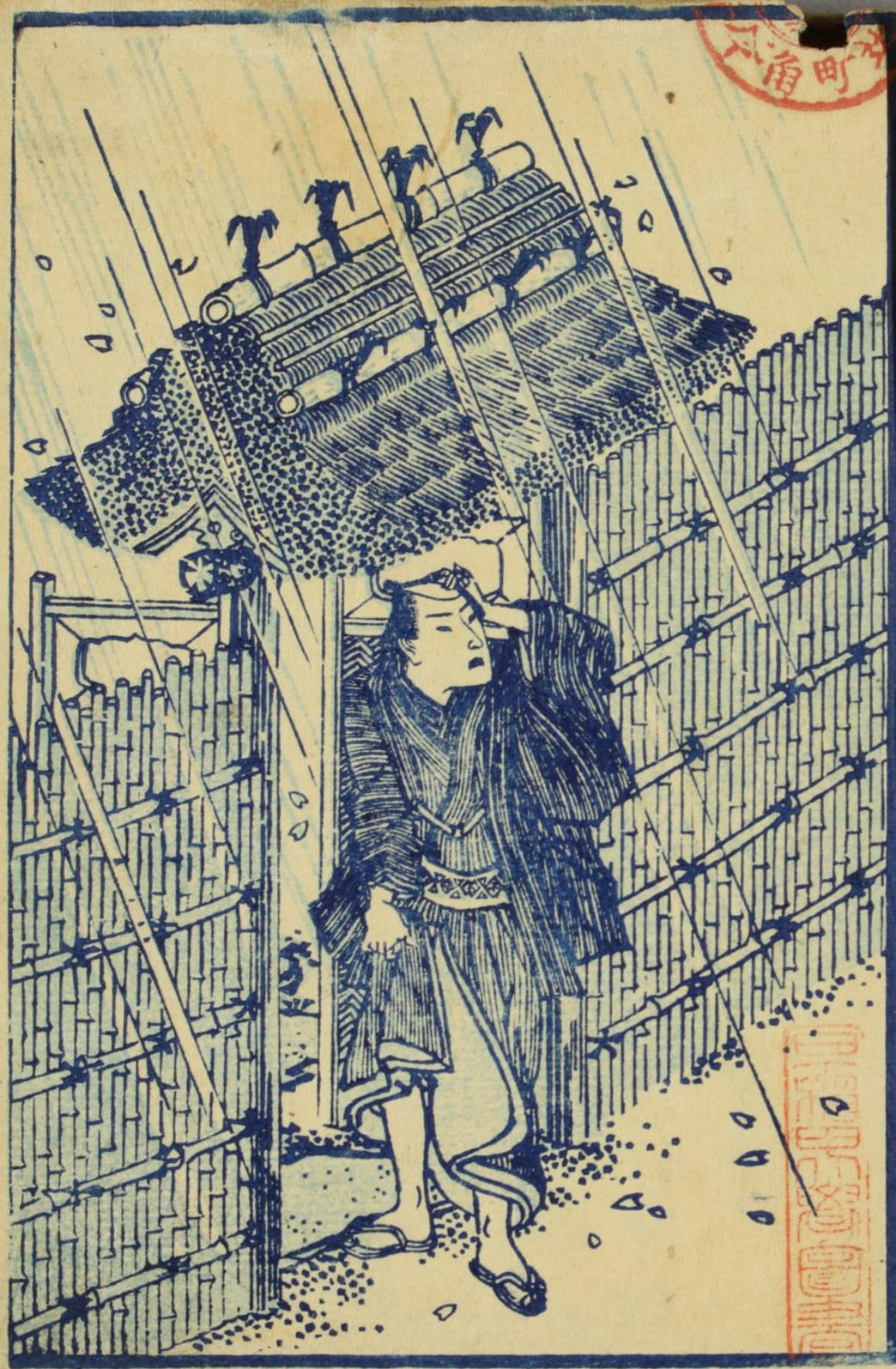




^ 13
3203
1





雨角町

雨角町

門
號
卷

へ 13
3203
1

へ 13
3203
1-2

昭和九年
十月八日
晴末

あがま たちまち
吾孀は春雨初編序

良禽を相木而栖と慮ひ又い情の下程を

俄少々の雨と志のぐ一樹の蔭を因思懐き

むの他より半はる蕪乳松の異見ありゆ

さぐ一河の流結婦多少は縁語成とらさ

艶形くる為の歌人目改母とひんの上は女實母

あがま 遊樂室新とある。金瓶山下を

寓居あり。為永春お子の筆致をあり

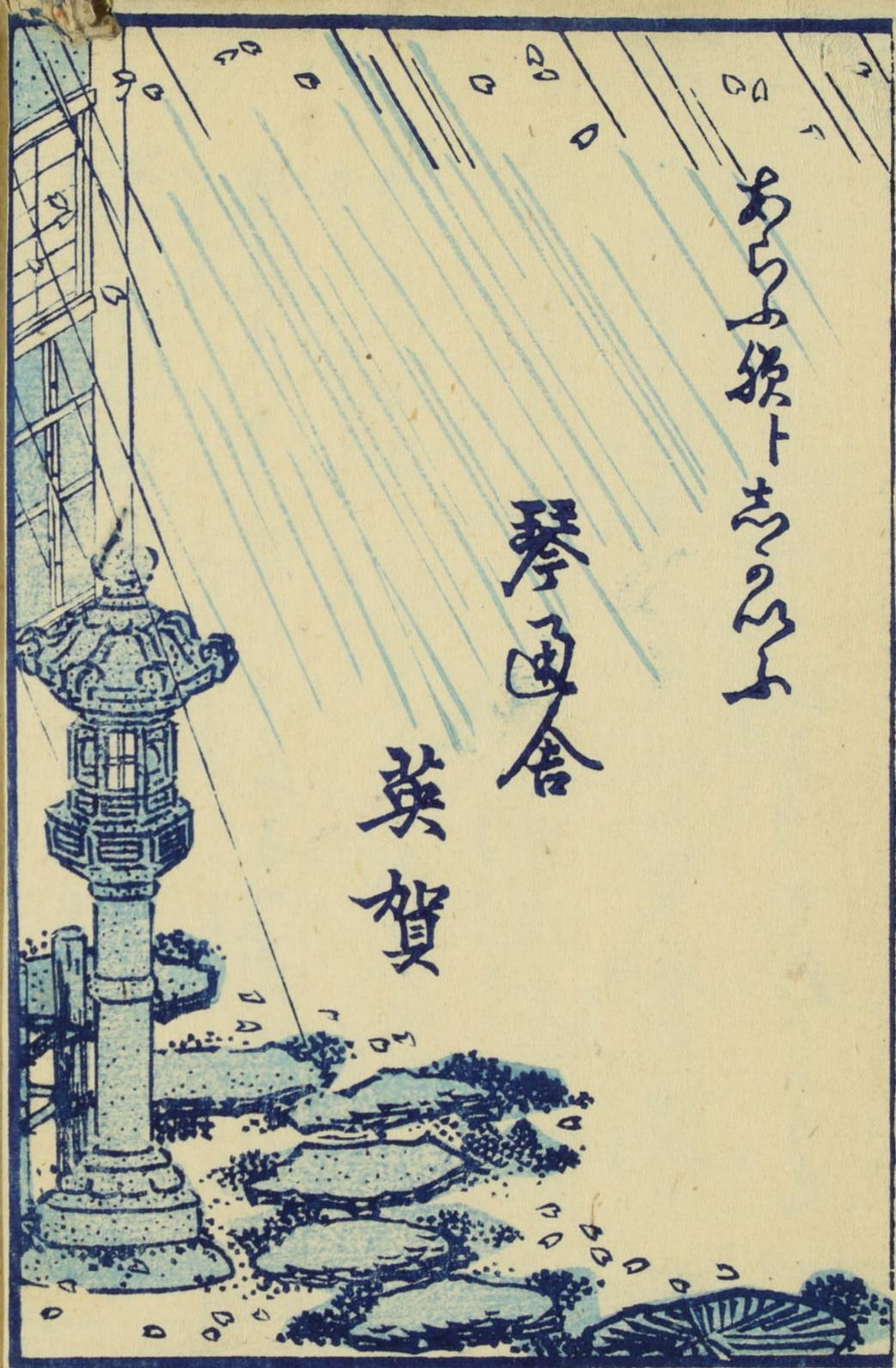
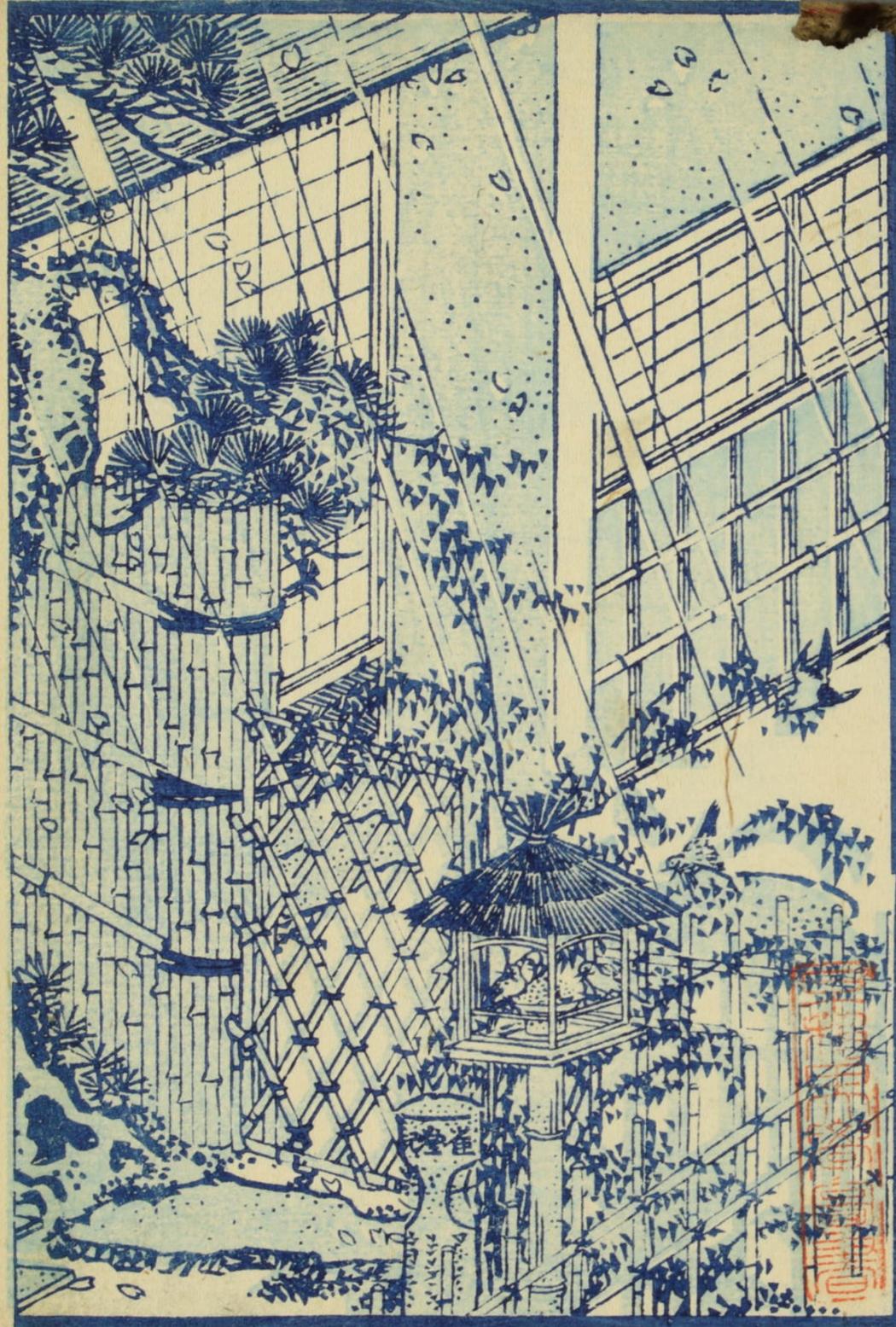
あがま 吾孀の春雨と題号あり。たす。青趣の楳

史の如きといふ。著述の草稿。まぐく實

情信意と解あり。て。漢版あり。書の初帖

此序を模索頼杖を。机あり。むねくうらも

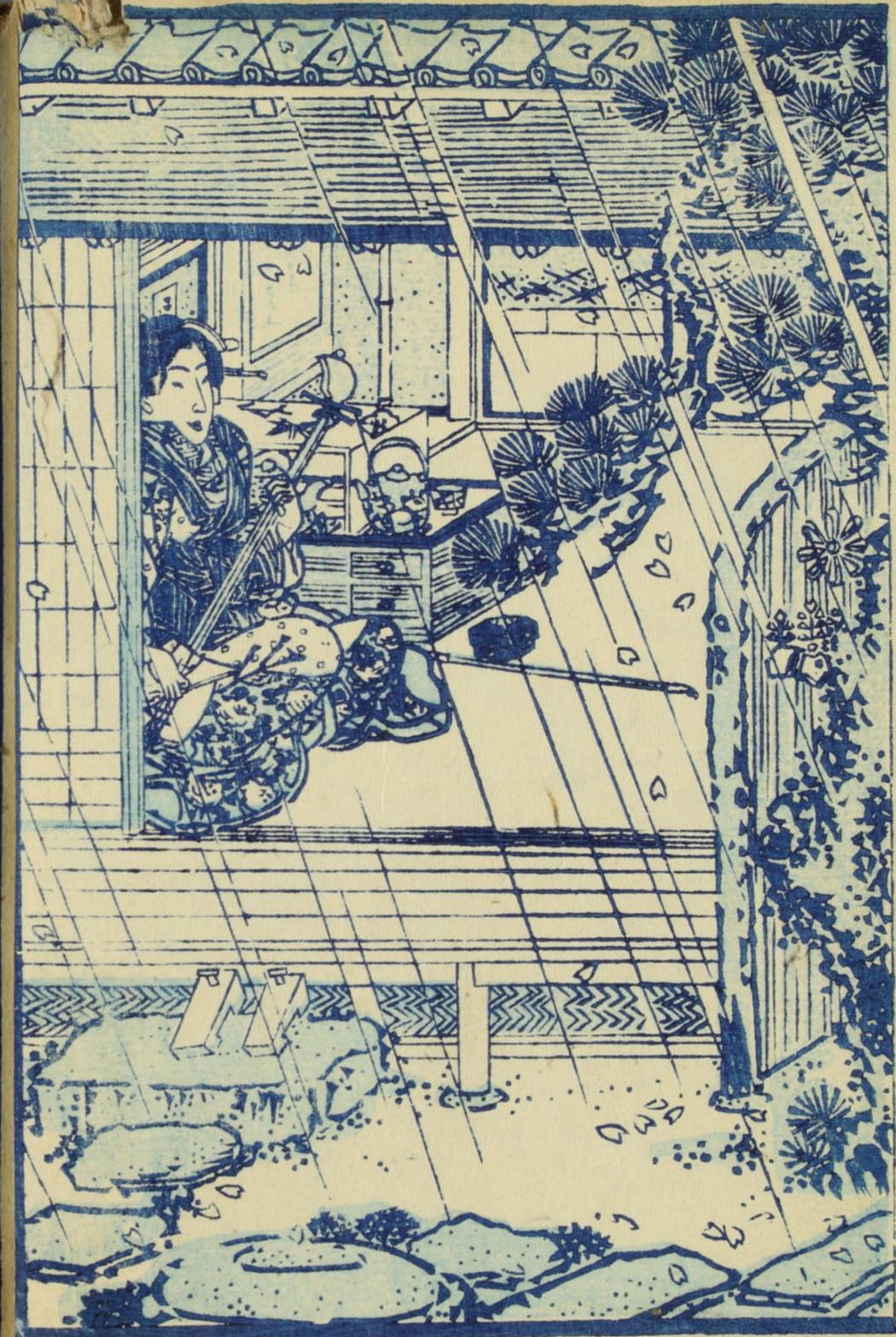
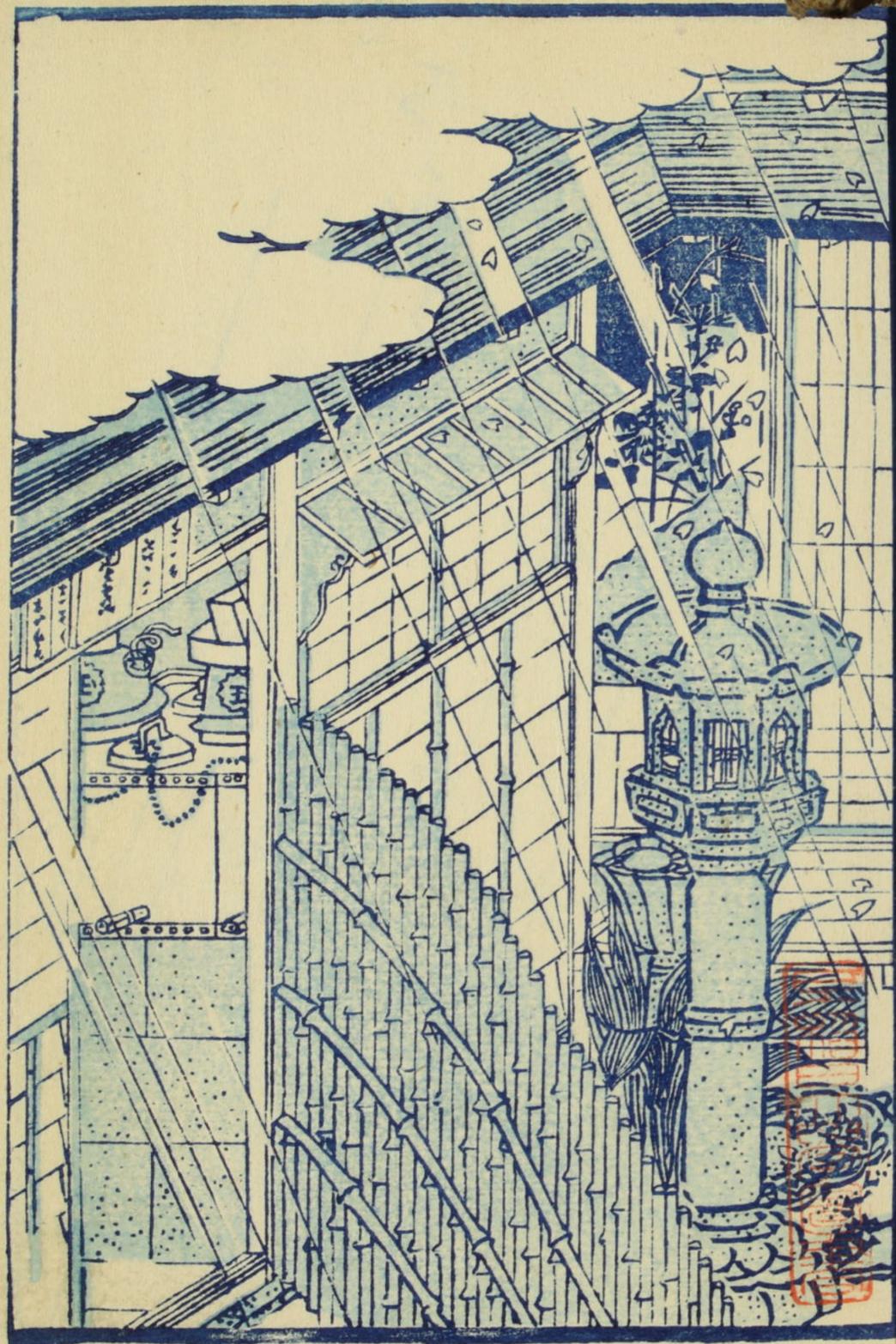


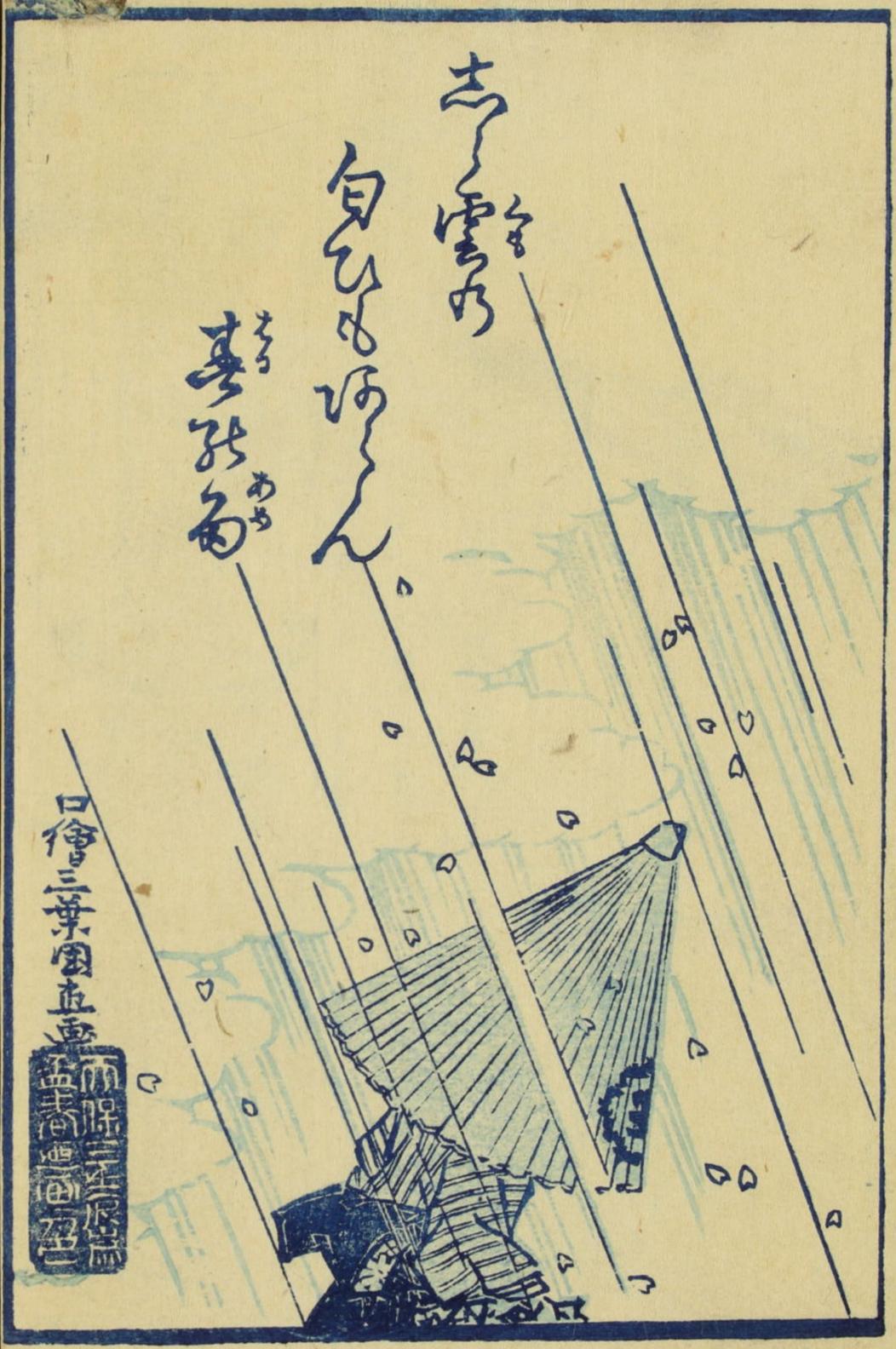


あらしの吹くとき

琴田舎

英賀





志雲

白ひのへん

まがら

口繪三葉園直画 西保三至辰端
 藍青西画 西保三至辰端

松間 吾妻 春雨 上

江戸 金龍山人 著



中環
 加えたるをわかんとなす。ト唄人のとりの言葉
 八景ハナチ 陰程さえてとをたら音どつと人とすい
 軒の露ひまよ 竹の根の隠居 雑居ありん
 うらまゝと 猶縁うらふまゝの雨の音あり

○東の上

一 五川合流

縁ゆかりの糸いと月下げつげ老人らうじんのこぼさるるおちる。伴とももあれ

たゞただ縁ゆかり若わかふ腰こしをうけと彼かのかこと「さあ

あゝああぞぞぞぞすすとと〜〜ぞぞめんめん下くだささいまいま〜〜ととあ

ままるる空そら夜よ徒た〜〜げげふふ極ごくるる顔かほ死し見みぬぬるるの

みみくく横よこ自みづかづづひひのの家いえ女によ桐きり火び桶か火び焚たき近ちかく

持もちのの〜〜女によ〜〜室むろめめ〜〜ああらら〜〜入いるる意いの

乃なぞぞああらら〜〜ああまま〜〜ああままののみみひひ〜〜ああままのの雨あま舎やとののを

〜〜ぞぞああらら〜〜ああままのの雨あま舎やとののを

〜〜ぞぞああらら〜〜ああままのの雨あま舎やとののを

〜〜ぞぞああらら〜〜ああままのの雨あま舎やとののを

〜〜ぞぞああらら〜〜ああままのの雨あま舎やとののを

〜〜ぞぞああらら〜〜ああままのの雨あま舎やとののを

〜〜ぞぞああらら〜〜ああままのの雨あま舎やとののを

〜〜ぞぞああらら〜〜ああままのの雨あま舎やとののを

〜〜ぞぞああらら〜〜ああままのの雨あま舎やとののを

〜〜ぞぞああらら〜〜ああままのの雨あま舎やとののを

○東の上

三 平川舎藏

... 懐へた... 抱ひしと... 持りの...
 ... けり。おま... 見...
 ... 考へ...
 ... 思ひ...
 ... さん...
 ... 思ひ...
 ... 先生...
 ... 先生...
 ... 先生...
 ... 先生...

...
 ...
 ...
 ...



東の土

東の土

五

五

さんが里をさんさんと大ゆめがありまうこのぞ
 よくあはれあるまはれよ。あま入さんの源さんと
 あろしあしあせうらうらうやせうたをて
 るまと思おすまそらうが。アノ時ぶんり万字のあ
 たるまうくうらう。度々相合ぐお、お合やして
 ああのことこそお近付ふるりのやせんが、時雲
 さんとのやせぬあひかきく、まうまうまう
 まうまう思ひまう、まうまうまうまう

け子、あま入の万字屋の玉菊さん
 り何特においでも目あくるもあま入さん
 り、あま入さん、あま入さん、あま入さん、あま入さん
 面白そめるあ方と、新造元やるあま入さん
 後、あま入さん、あま入さん、あま入さん、あま入さん
 さん、あま入さん、あま入さん、あま入さん、あま入さん
 さん、あま入さん、あま入さん、あま入さん、あま入さん

ま〜いふ。マヤ^{まや}は免る^{めんぬ}まじらや〜。とん^{とん}な^な浮^う氣^きも
 る^るい^いもん^{もん}で^でト^トの^のい^いもの^{もの}ご^ご〜く^く〜取^{とり}ま^ま〜[〜]整^{ととの}
 か〜上^う甲^かの^の相^あ〜ら^らん。は^はら^らけ^けの^の裾^{すそ}短^たろ^ろ〜[〜]益^{えき}
 ち^ち六^{ろく}ち^ちあ^あら^らな^な〜ね^ねど^どき^きふ^ふり^り〜形^{かたち}由^{よし}あ^あ今^{いま}も
 ぐ〜ら^ら〜[〜]白^{しろ}糸^{いと}地^ぢの^の産^う更^{さら}紗^さ短^た本^{ほん}の^の色^{いろ}。
 紺^{こん}博^{はく}多^たの^の巻^ま帯^たあ^あら^らも^もよ^よあ^あの^のは^はは^はら^らは^はら
 み^みへ^へ白^{しろ}粉^{こな}の^のす^す〜[〜]漆^し〜[〜]も^も他^{ほか}み^み見^みえ^え〜[〜]ま
 男^{おとこ}が^が惣^{そう}手^てん^んが^があ^あら^ら〜[〜]尻^{しり}と^との^のい^い〜[〜]團^{だん}侍^じ持^ぢ。

〜[〜]懸^{けん}女^{にょ}が^がこ^こ〜[〜]困^{こん}辱^{じやく}の^の徒^た住^{ぢゆう}居^いり^り〜[〜]ま
 由^{よし}急^{きゆう}ぞ^ぞ〜[〜]ら^らづ^づぬ^ぬる^るふ^ふえ^えの^の大^{だい}家^けの^の歴^{れき}〜[〜]なり
 志^しが^が親^{おや}而^し金^{かね}石^{いし}鉄^{てつ}〜[〜]進^{しん}と^との^のい^い〜[〜]人^{ひと}〜[〜]君^{きみ}人^{ひと}〜[〜]遠^{とほ}く
 殊^{こと}言^{こと}や^や上^う〜[〜]さ^さ〜[〜]妻^{つま}遍^{べん}す^すも^も血^ち〜[〜]身^みあ^あと^となり。
 その^{その}妻^{つま}〜[〜]門^{かど}希^{まれ}た^た〜[〜]ひ^ひみ^みら^らり^り。遠^{とほ}路^ろ〜[〜]遠^{とほ}く
 その^{その}お^お〜[〜]母^{はは}親^{おや}の^の大^{だい}病^{びやう}甘^{かん}ん^ん〜[〜]こ^こ〜[〜]ま^まま
 を^を北^{きた}里^りへ^へ勤^{こま}み^み出^{いで}せ^せ〜[〜]か^か。その^{その}あ^あら^らも^もな^なく^く血^ち本^{ほん}
 家^け〜[〜]り^り。先^{まづ}君^{きみ}死^し押^{おし}〜[〜]め^め。當^{あた}時^{とき}初^{はつ}君^{きみ}の^の血^ち代^{しろ}と

○東の上

し 三川合藏

る。いざし。必^{ひつ}あ^あの^のあ^あら^らち^ちあ^あら^らり^り。金^{かね}を^を後^ご
 の^の進^{しん}り^り忠^{ちゆう}信^{しん}無^む二^にの^の侍^{ざむらい}なり。其^{その}妻^{つま}子^こを^を追^{おひ}
 ち^ちり^りぞ^ぞけ^けら^らま^まし^し。一^{ひと}こと^{こと}甚^たゆ^ゆの^のと^と不^ふ便^{べん}の^の
 い^いろ^ろり^りの^の早^{はや}と^とま^まじ^じと^と召^めす^す。其^{その}子^こを^を
 助^{すけ}。ま^まま^ま入^{いれ}る^る年^{ねん}か^かう^うと^とも^も家^{いえ}を^を職^{しやく}と^とな^なし。
 忠^{ちゆう}信^{しん}の^の亡^{なげ}霊^{れい}を^をま^まぐ^ぐさ^さむ^むべ^べ。一^{ひと}と^と本^{ほん}願^{ねん}安^{あん}法^{ぽう}の^の
 け^けろ^ろが^が此^{こゝ}を^をま^まさ^さが^がと^とあ^あみ^み鉄^{てつ}と^と其^{その}人^{ひと}婚^{こん}する^る也^{なり}。
 の^の痛^{いた}氣^きれ^れそ^の男^{おとこ}の^の貧^{ひん}苦^く死^しす^くい^まし^し。大^{おほ}

の^のす^すと^とし^しも^もう^うち^ちす^すと^とわ^わく^くづ^づと^とお^お出^で
 入^{いれ}の^の町^{まち}人^{ひと}大^{おほ}阪^{はん}を^を返^{かへ}り^りま^まし^しと^とい^いふ^ふの^のお^お家^{いえ}の^の
 どの^{どの}こ^こで^で廓^{くわく}外^{がい}り^りど^どせ^せが^が一^{ひと}夜^よ懸^{けん}花^{はな}を^を沈^{しず}
 男^{おとこ}の^の何^{なに}面^{めん}自^{みづか}みの^のめ^めと^とか^かな^なま^まへ^へう^うへ^へま^ま
 家^{いえ}中^{ちゆう}の^の人^{ひと}お^お顔^{かほ}を^をあ^あら^らせ^せる^るべ^べな^なや^や難^{なん}お^お男^{おとこ}も^も
 大^{おほ}う^うら^ら。い^いの^のこ^こを^をま^まい^いぬ^ぬめ^めの^のあ^あら^らた^た。聞^きく^く
 解^とみ^みひ^ひと^とり^り僅^{わずか}し^しと^と世^よを^をす^すご^ごし^しと^とい^いた^た。を^を
 母^{はは}と^と背^せへ^へ中^{ちゆう}つ^つら^らし^しと^とい^いた^た。ら^らの^のあ^あら^らう^うみ^みも

東の...

平川舎藏

らしく泣き入り立ちあふまふ六藝がうりを見え。
 まつ「あつてあのふざげでんト久
 源「あつてサぞう君とよなる まつ「僕もを
 めい。うらりるびぐあるまはヨ。そしとせ
 う梅我ぬぬくあるトやあつてませんら
 いびとらふむいびとや。也。所久人
 ちくでいびとまはたがた。此方みたり来
 居つてまはたがた。かよ。そふりりく。苦勞

あつて。あつて。あつて。あつて。あつて。
 私我。あつて。あつて。あつて。あつて。
 女。あつて。あつて。あつて。あつて。
 相。あつて。あつて。あつて。あつて。
 胸。あつて。あつて。あつて。あつて。
 涙。あつて。あつて。あつて。あつて。
 あつて。あつて。あつて。あつて。あつて。
 入相の。あつて。あつて。あつて。あつて。

ふさあけくしくびく小中まぬ兩のそら
るぐゆ書寫然してむ居くまらるる

第二回

芽の宿根の音もろく。しとちゆ中ふぬ
かろ。軒窓ふちろき垣根ごー。雅ふざ
ろ三味線の。調子るをしく。格をまけが

「世の中らあまたとてあはれ角のあはるる

願ひがらうかきいへし

「あはれは世の

さんもちらと知とくてゆらうとあはれ

ぞみせらんるふ海をひらうと。そあそか

うらうしく。物のいせなるあはけらるる

かろ。の種をまき。うらとけきと心

せく。風情をりまじがすまふ。是るまて。初念の

ごまぐろく。すんもの物ぐらふつづ。そらく

あはる。次の問より。うら。姉さん。うら

るんすト。さつし陸まのそまへ *Shōkyō* へ

ありし酒肴もむら *Shōkyō* 毎のま

酒のうんま *Shōkyō* へ

せうし *Shōkyō* へ

あびよ *Shōkyō* へ

のまへ *Shōkyō* へ

もあ *Shōkyō* へ

てら *Shōkyō* へ

ちが *Shōkyō* へ

あ *Shōkyō* へ

ま *Shōkyō* へ

ち *Shōkyō* へ

い *Shōkyō* へ

わ *Shōkyō* へ

り *Shōkyō* へ

ら *Shōkyō* へ

ら *Shōkyō* へ

ぞいし〜今^{いま}に^{いま}お出^いづの^のよが^の一人^{ひとり}久^くく^く
 善^{ぜん}孝^{こう}さん^{さん}が^が世^よ一^{いつ}所^{しよ}で^でい^いま^まに^に下^{くだ}り^りて^て
 ま^まに^にい^いま^まに^に海^{うみ}原^{はら}を^をあ^あら^らわ^わす^する^るに^に
 さ^さん^{さん}と^との^の櫻^{さくら}川^{がわ}の^の上^{うへ}へ^へ入^いり^りて^てハ^ハイ^イハ^ハイ^イと^とい^いふ^ふ
 じ^じい^いし^しを^をあ^あら^らわ^わす^する^るに^にト^トり^りひ^ひる^るが^が〜
 じ^じい^いの^のあ^あら^らわ^わす^する^るに^にト^トり^りひ^ひる^るが^が〜
 一^{いつ}も^もの^のあ^あら^らわ^わす^する^るに^にト^トり^りひ^ひる^るが^が〜
 酒^{さけ}の^のあ^あら^らわ^わす^する^るに^にト^トり^りひ^ひる^るが^が〜

酒^{さけ}の^のあ^あら^らわ^わす^する^るに^にト^トり^りひ^ひる^るが^が〜
 酒^{さけ}の^のあ^あら^らわ^わす^する^るに^にト^トり^りひ^ひる^るが^が〜
 酒^{さけ}の^のあ^あら^らわ^わす^する^るに^にト^トり^りひ^ひる^るが^が〜
 酒^{さけ}の^のあ^あら^らわ^わす^する^るに^にト^トり^りひ^ひる^るが^が〜
 酒^{さけ}の^のあ^あら^らわ^わす^する^るに^にト^トり^りひ^ひる^るが^が〜
 酒^{さけ}の^のあ^あら^らわ^わす^する^るに^にト^トり^りひ^ひる^るが^が〜
 酒^{さけ}の^のあ^あら^らわ^わす^する^るに^にト^トり^りひ^ひる^るが^が〜
 酒^{さけ}の^のあ^あら^らわ^わす^する^るに^にト^トり^りひ^ひる^るが^が〜
 酒^{さけ}の^のあ^あら^らわ^わす^する^るに^にト^トり^りひ^ひる^るが^が〜
 酒^{さけ}の^のあ^あら^らわ^わす^する^るに^にト^トり^りひ^ひる^るが^が〜

ま「ナナサ ^{あつち}此のちうう。さしーが ^{あつち}あつちを

あしで居る ^{あつち}あつち。さしーが ^{あつち}あつちのうま

らあしーうー ^{あつち}あつちー ^{あつち}あつちー ^{あつち}あつち

ちー ^{あつち}あつち ^{あつち}あつち ^{あつち}あつち ^{あつち}あつち

ま ^{あつち}あつち ^{あつち}あつち ^{あつち}あつち ^{あつち}あつち

ひ ^{あつち}あつち ^{あつち}あつち ^{あつち}あつち ^{あつち}あつち

さ ^{あつち}あつち ^{あつち}あつち ^{あつち}あつち ^{あつち}あつち

ま ^{あつち}あつち ^{あつち}あつち ^{あつち}あつち ^{あつち}あつち

あ ^{あつち}あつち ^{あつち}あつち ^{あつち}あつち ^{あつち}あつち

ま ^{あつち}あつち ^{あつち}あつち ^{あつち}あつち ^{あつち}あつち

あ ^{あつち}あつち ^{あつち}あつち ^{あつち}あつち ^{あつち}あつち

ま ^{あつち}あつち ^{あつち}あつち ^{あつち}あつち ^{あつち}あつち

あ ^{あつち}あつち ^{あつち}あつち ^{あつち}あつち ^{あつち}あつち

ま ^{あつち}あつち ^{あつち}あつち ^{あつち}あつち ^{あつち}あつち

あ ^{あつち}あつち ^{あつち}あつち ^{あつち}あつち ^{あつち}あつち

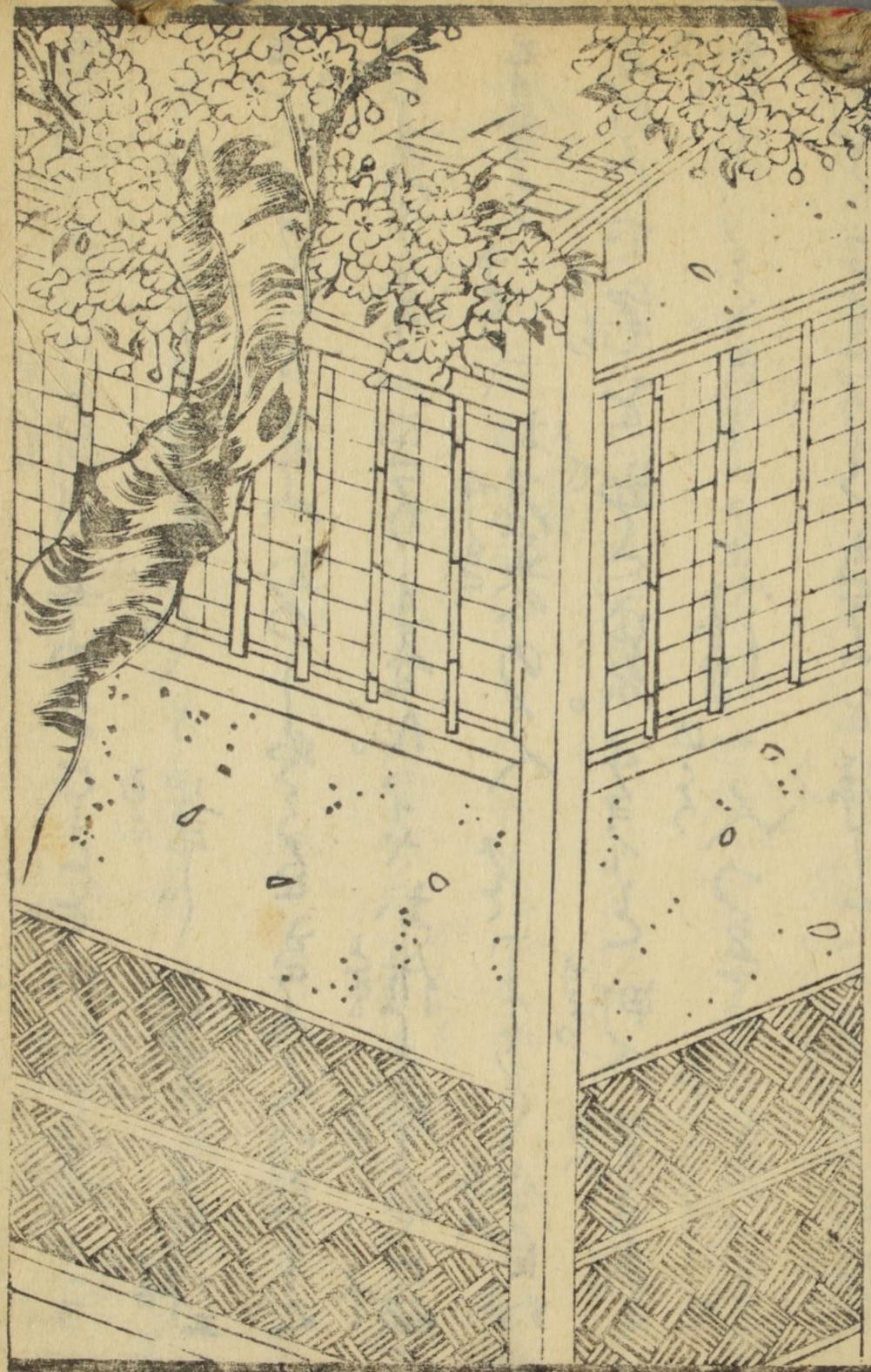
ま ^{あつち}あつち ^{あつち}あつち ^{あつち}あつち ^{あつち}あつち

あ ^{あつち}あつち ^{あつち}あつち ^{あつち}あつち ^{あつち}あつち

ま ^{あつち}あつち ^{あつち}あつち ^{あつち}あつち ^{あつち}あつち

あ ^{あつち}あつち ^{あつち}あつち ^{あつち}あつち ^{あつち}あつち

ま ^{あつち}あつち ^{あつち}あつち ^{あつち}あつち ^{あつち}あつち



東の山

三十四合

あつちのりる候の中なることなむらつて居るヨ。

そまじこころすあしぐら業ぐらまはる候

まああつちがそよあつちあつちあつちあつちあつち

てよりしうじせいのません。イヤお供とぢやの飯

まあまう まま「お屋敷のり人」ま「イヤしく今自の

あので宅とせよあ。まヨイと町人笑あのみ

あつちあつち。ままよをば清一人つまむ大坂を

あつち。ままあつちあつちあつちあつちあつちあつち

あつちあつちあつちあつちあつちあつちあつちあつち

あつちあつちあつちあつちあつちあつちあつちあつち

あつちあつちあつちあつちあつちあつちあつちあつち

あつちあつちあつちあつちあつちあつちあつちあつち

あつちあつちあつちあつちあつちあつちあつちあつち

あつちあつちあつちあつちあつちあつちあつちあつち

あつちあつちあつちあつちあつちあつちあつちあつち

あつちあつちあつちあつちあつちあつちあつちあつち

あつちあつちあつちあつちあつちあつちあつちあつち

あつちあつちあつちあつちあつちあつちあつちあつち

あつちあつちあつちあつちあつちあつちあつちあつち

あつちあつちあつちあつちあつちあつちあつちあつち

風吹くついでに水はよく濁るわが川は

あまのこゝろをこゝろをこゝろをこゝろを

こゝろをこゝろをこゝろをこゝろをこゝろを

こゝろをこゝろをこゝろをこゝろをこゝろを

こゝろをこゝろをこゝろをこゝろをこゝろを

こゝろをこゝろをこゝろをこゝろをこゝろを

こゝろをこゝろをこゝろをこゝろをこゝろを

こゝろをこゝろをこゝろをこゝろをこゝろを

こゝろをこゝろをこゝろをこゝろをこゝろを

こゝろをこゝろをこゝろをこゝろをこゝろを

こゝろをこゝろをこゝろをこゝろをこゝろを

こゝろをこゝろをこゝろをこゝろをこゝろを

こゝろをこゝろをこゝろをこゝろをこゝろを

こゝろをこゝろをこゝろをこゝろをこゝろを

こゝろをこゝろをこゝろをこゝろをこゝろを

こゝろをこゝろをこゝろをこゝろをこゝろを

こゝろをこゝろをこゝろをこゝろをこゝろを

甘くらんるせ入 着ハハイくイヤモシ冠はまも俗
 まりふらつてまてでやまませうが。外のいふ
 じふとませ。あるこのお丹のう人お袋を
 のおりーやるみハ。サテ 若考や。親のころを
 ぶあつとむ昔々ののこくごが。根考の
 ちまらるが今ものいそ亭まハりやご男ハ
 まらひつてたろうのいそくみらが一生それ
 しくむむむるものでもういふ人ハいふん

氣でも。おのづから人からあまら。ま
 ぼりい せんねん 親考が 建考なるうらな
 ろがうららへいぞにるる遠があまらせん
 ちまらるがせうくあまらるるうらな
 者さうなるよのよ。とまらるるうらな
 ちまらるるあづるあまらるるこのお丹が
 ちまらるるなるいふまらるるこくも
 ちまらるるなるいふまらるるこくも

總頁の^い出の^きききき^ぐぐ。あつらへ^るるの^まま

あつら^へへ^るるの^ままあつら^へへ^るるの^まま

を^りり^けけ^しし^まま^しし^ここ^のの^まま

ま^はは^らら^ささ^ぬぬ^たた^らら^しし^しし^まま

ま^はは^らら^ささ^ぬぬ^たた^らら^しし^しし^まま

ま^はは^らら^ささ^ぬぬ^たた^らら^しし^しし^まま

ま^はは^らら^ささ^ぬぬ^たた^らら^しし^しし^まま

ま^はは^らら^ささ^ぬぬ^たた^らら^しし^しし^まま

ま^はは^らら^ささ^ぬぬ^たた^らら^しし^しし^まま

ま^はは^らら^ささ^ぬぬ^たた^らら^しし^しし^まま

ま^はは^らら^ささ^ぬぬ^たた^らら^しし^しし^まま

ま^はは^らら^ささ^ぬぬ^たた^らら^しし^しし^まま

ま^はは^らら^ささ^ぬぬ^たた^らら^しし^しし^まま

ま^はは^らら^ささ^ぬぬ^たた^らら^しし^しし^まま

ま^はは^らら^ささ^ぬぬ^たた^らら^しし^しし^まま

ま^はは^らら^ささ^ぬぬ^たた^らら^しし^しし^まま

つゝいふまでも。かのうらふ推量しなく。さそくを免
 がかさゆき。一雨あがり。の男とを。出まの神の
 こゝろを。と。思ふ。今さう。うらふ。と。笑
 見たり。いふ。も。あつ。を。ざり。と。いふ。うらふ
 後ひ。らる。

松間あまのたるまの
 花情 吾婁春雨上

文明 武野續談 大本 狂訓亭撰
 世説 五卷


松竹梅乃 江戸座子湯真頼夜 全六冊

為永春水作
 湯真頼夜 江戸座子湯真頼夜 全六冊
 湯真頼夜 江戸座子湯真頼夜 全六冊

東の中

松間 あきの 東春 あきの 雨 あま 中の巻

江戸

金龍山人著

○第三回

さても源次郎げんじろうの此家この家にぬきまどとこそを立寄たよりしに
あひもよぐぬきまどから花はなの雨あめまゝといつれて心こころあふさ
一間ひまのうち独ひとりはくぐりあかすげふ世よの中ちゆうの終おしまひ文ぶん小
うはりやあひのあふ我われとこら身みとさへあはしとあ
ぬいあまどたう今いま終しまひ飛鳥とびの花はなと見えとて出で

るののぐ夜楼よるろうとまゝこころ心こころにうりうり爰こゝみく雨あめ
降ふるればりのよ花はなのあふりあひこころ心こころと救すくす
浅あさまかりる丸夫まるぶる彼あま取明寺とくめいじのはなに

つくまびつあひまきめくつれらん
おむきまどたうんたりけり

とみぐうあのはなはあふりあひこころ心こころと救すくす

一の額がくに
世よ乃なうさ成なる世よにますわく又またひら

東の中 二 平川舎藏

若方もどめりしりまの山う歩

八橋舎調テありやたう古人庭訓舎の連で

秀逸の多イ人ぶ此うの中かも妙案ごイヤあ

おも月のうへにとたひらりあまびつうくふんト

こびる小府へ人菓子と茶成たぐえ隔紙とぬ

ておろの氣の毒そらにうアアさたむどにやの

る成そらヤキーうたれどはまくよふごんまて坂

更におまんとむおまの所がごごりまううごんま

も一軒おわりやせがま色まほトつごおろ合

点せむもへまくごぶらうもく外はまううを

こはらう歩めうまいらません今晚のあまりな

ままーしそまのあつごよごりまらがおまへの格

別ごもお宅のびよまもあまびつうふは信切ふ

あつあつくもしそまへふうあつごひるあま

まののぞびあしまかうがま下もおむあだのある

宅びらびあしませんトつらう御尚書様ごうく

東の中

三 平川舎藏

男とこと侍さむらいるべたたありどつつさあぐぐハハ靴くつふふむむさ
 是こゝ一ひとつつるるええでもも油あぶらののああるるなないととああひひをを一ひとの
 次つぎのの方かたにに知しららめめ文ぶんのの勢せい色いろののああららむむささま
 るるかかねねどもども 海うみをを一ひとかかららささふふねねららううそそままよ
 めめははつつぶぶめめぬぬままままくくうう且かつ丁てい見み色いろ里さとのの其その如ごとひ
 ぢぢにに笑わらふふをを花はなのの枝えだ折をりののみみちちああららふふイいサさハは
 按おさ内うちのの牛うしををここぎぎららふふといいひひままがが 這は入い善ぜん孝こうか
 一ひともも且かつ形かたちぶぶつつふふりりんんででびびぎぎのの十じゅう十じゅう 海うみににヤや色いろの

誠まこと孝こうさんさんぞぞううししととああらら 兵へい五ご先せん刺さ撃げきののるる哉や
 ああららとと見み実まこといいちいちとと透すう同どうくくるる方かたととびびくくるる
 今いまかかららななたた一ひとつつにに北きた町まちのの且かつ形かたちどどりりととよよくくをを
 ににああららええににおお遠とほままいいららううままままおお同どうよよかかららううと
 ぞぞんんどどまま一ひとかかままふふああららとと思おも按おさあありりがが不ふせせま
 かかららくくももるるぶぶりりまま 六む藏ざうふふ失しつ礼れいままががああららうう
 へへいいつつららああららまま一ひととと無む常じょうふふううちちはは色いろ座ざへへ入いりりああり
 善ぜん孝こうハハああららままここふふああららまま一ひととと百ひゃくつつまま一ひととと北きた町まちの

東の... 北町の

さら何なるもまき清き夜の若旦那めふごころりまきす
 私こころの証人しるしごころもまきこころに両家とも心こころあはく
 まき一ゆやくこそまよやアうまじのわんわんに今日の両
 ハトはとのひきして口くちごりも風痛かぜそくまぬ男おとこまきまきに
 大障おほざりよありまきしてまひもよめぬは厄やくめまきえさう
 せよろあふトまきかその各おのづかも四方よつふまき入世間よの度
 き桜川さくらがわまきり一ゆやくに双方ふたうの若わかのうへつまびらふ
 うり一ゆやく源げん江え希きも心こころさけ其夜そのよハちふ酒さけまき
 翌日あしたのりくめておまきさか母親おとちいと近付ちかづふまき各對おのづかを
 一ひとく別わかと一ひとかこそまき成なりえふ一のけめさくつりつ
 結むすぶ赤繩あかじゆんのつるまがむわろも何なんと中なかつむたより
 急いそ衣ぎあころひ結むすえまら針はりのまきまらちあくまぬ
 夜半よるハ二人ふたり中なかつよく畳たたみ美みねいと松葉まつばのめんごうふ
 もたまれぬ中なかつと薄うすくたひむ色いろのちどけなさ
 一ひと婦めかけさんまき一ひとあねらち初はつに逢あえんがむ
 の時ときも宅うちより出でるまきまきまきまきと翠あざひてつる

東の口

二一

夏の日
 涼風吹く
 夕涼の
 楽しみ
 さまざま
 あり
 けり
 哉

地味
 雅
 麗
 かな



涼風吹く
 夕涼の
 楽しみ
 さまざま
 あり
 けり
 哉



毛づくろいをして、おかしうもて、まき入るうへにせと
 いらしおまへえ、ほえの真せ、おつとえ、てりてお茶
 とおびるといふ、きもつてお、夜食といふ、まうにん
 もあぐら、おとく、何も、たつ、え、ごち、あ、わりま
 せん、う、ま、つ、を、お、つ、死、お、ま、人、こと、お、より、並、人、何、人
 づ、惚、れ、て、深、え、よ、初、め、の、と、お、つ、ま、ひ、で、み、ひ、つ
 ト、し、お、わ、く、お、ら、う、六、赤、面、う、へ、ち、く、し、も、る、作、え、ん、ご
 り、お、い、え、え、な、お、び、へ、の、少、し、も、何、り、ま、せ、ん、お、い、り、て

を、え、る、あ、か、お、ま、い、今、の、の、う、ま、さ、私、え、ど、が、私、と
 の、と、と、て、お、ど、を、ご、お、ま、ん、ま、い、ま、く、何、も、で、も
 深、え、の、ひ、び、ぐ、物、造、が、好、ぶ、よ、と、ま、い、ご、う、廓、へ、お、出
 の、時、お、も、薄、雲、え、が、惚、て、お、つ、の、お、花、里、え、ん
 と、い、ふ、十、六、よ、あ、か、子、と、色、と、い、て、大、さ、な、ぎ、を、あ、つ、ご、う
 う、へ、そ、ま、い、お、ま、い、え、え、え、人、幸、ハ、私、が、あ、つ、でも、う、つ
 へ、う、つ、て、も、と、お、う、う、何、れ、が、面、白、ら、う、う、と、私
 の、お、う、な、ぶ、ら、う、き、く、お、う、う、の、め、が、何、お、私、に、い、ま、す

東の口
 平川合巻

のうきさくをねづらどりみくらて却つて男の
 物^飛のめさその恋^{かま}惚ハ十四十五の女^{おんな}希^{あま}えが
 のあおひえよりお容^まがえとあつのがいらも
 ままういよとまはそらでも第一^{あち}こころの^を深^かえ
 のあひでささいまもあせ入らうあせでもまも
 あふが氣^きにいそまいのでそあひなわ入らう
 けらぞとこらぬうやまもまもあせ入らうあせ
 であつちあもぶらよトやうとさうていれられべし

かくそえあうあそらにナキアアかたみヨ
 ぞあとうにあひうへあとうハ深^かえがよのね
 究^あ少^ま一男^{をとこ}がこころく^あ魂^{たま}がこころくつてぶいた
 よあひまぞあせ入らうあせ入らうあせ入らう
 ああれがいつくせとあふでもあつてぞえいら
 むく女^{おんな}があわて氣^きのかをまもるのあたま
 あひまうそらぞら深^かえんがのうと男^{をとこ}がこころ
 氣^きがめりまいとあひまハあせ入らうあせ入らう

あゝあゝことごとくしそそなま焼くぐせ成お
 しのぞらう大さ保えにそうしらくは後と申
 ざらうねうへまき焼え焼く焼くくさ
 まする何とこちれがそえみるをさすすりのう
 取うしと成おしひでまいよまきアサおきうええ
 おまへの並ねん氣よまきうこらへヨトーまき
 ほんとうにまきよかありでも私ハおれのちあを
 と申すあまのう氣よかけであつたおし中
 よな色をぬしのうゆまきゆ念るまきおろ
 つのろふか、保ひ保へそえあう三人一野ま
 寐かうすとしそまきくびらうりまきくろのるん
 うア引私ハまきまきにまき成ぶしこあは保え
 ぞね人今まをうまきくとおひどやまへうと云
 取入下女のお初ハ揚子よりまへ保きぬのお土産
 でござのまねトあぶうて方元春七とありほど
 保たるとびまへ陸春亭のころ元がおまといのど

東の中
 八
 平川舎藏

此知格をりませト まきアイヨ けいハハお嬢 お嬢えハ ごんごん
 下へイすこーお ごんごん ごんごん ごんごん ごんごん ごんごん ごんごん
 してお ごんごん ごんごん ごんごん ごんごん ごんごん ごんごん ごんごん
 軍 ごんごん ごんごん ごんごん ごんごん ごんごん ごんごん ごんごん
 ろりに ごんごん ごんごん ごんごん ごんごん ごんごん ごんごん ごんごん
 まく ごんごん ごんごん ごんごん ごんごん ごんごん ごんごん ごんごん
 製 ごんごん ごんごん ごんごん ごんごん ごんごん ごんごん ごんごん
 ま ごんごん ごんごん ごんごん ごんごん ごんごん ごんごん ごんごん

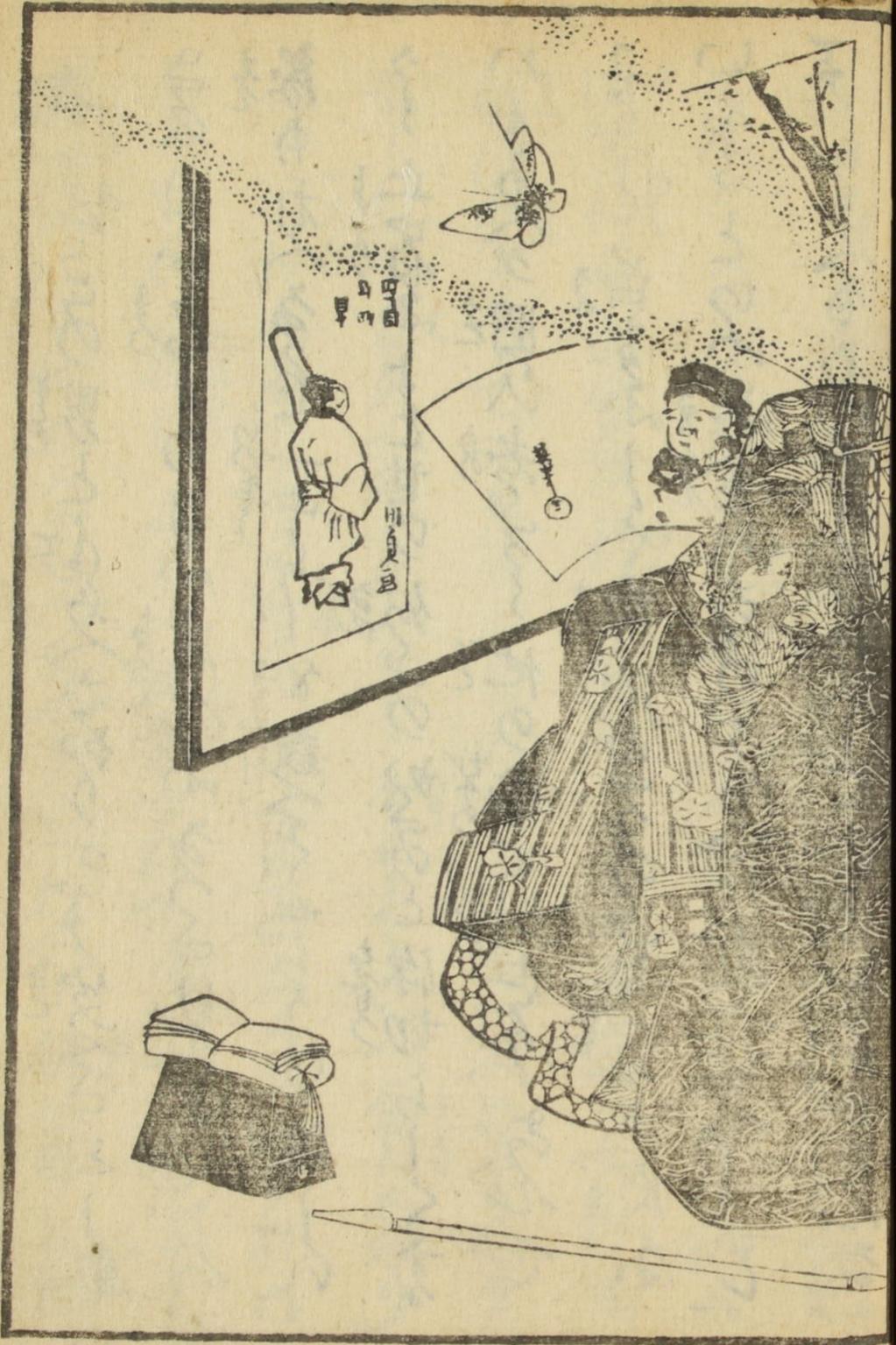
かい ごんごん ごんごん ごんごん ごんごん ごんごん ごんごん ごんごん
 初 ごんごん ごんごん ごんごん ごんごん ごんごん ごんごん ごんごん
 本 ごんごん ごんごん ごんごん ごんごん ごんごん ごんごん ごんごん
 景 ごんごん ごんごん ごんごん ごんごん ごんごん ごんごん ごんごん
 阿 ごんごん ごんごん ごんごん ごんごん ごんごん ごんごん ごんごん
 も ごんごん ごんごん ごんごん ごんごん ごんごん ごんごん ごんごん
 ま ごんごん ごんごん ごんごん ごんごん ごんごん ごんごん ごんごん
 色 ごんごん ごんごん ごんごん ごんごん ごんごん ごんごん ごんごん

あつたかゝるのまはせの色のまのひけ入トウ入りしるに
むらゝくまへそのまのひけ入唐所まふ小まごつた
まのつこ有る一とコナれてコナく咽あまのるか
コナが落でゆうちゆうら〜くあつ〜と拵んで
あつのごとどまりこみ入あつらが叔母涙茶老と
異名一とみごときろろ強役の娘へびりり
取う〜く〜もの〜せの悪言と涙は糸糸きりせ
トと書つハア井おむとえ静う〜ておととおまの

目かあるところのヨ一とあまのりのお客よ三のん
の〜あ〜入〜目か覚やうか目か決まやうかお色
かあ〜る〜あ〜ね〜く〜宅へ〜く〜〜トもあ
と〜る〜人があ〜る〜〜びよま〜この〜さ〜ら〜く
あ〜る〜で〜ら〜ね〜り〜書〜ハ〜今〜お〜ま〜を〜さ〜ぬ〜か〜あ〜る〜り
拵〜と〜と〜連〜に〜ゆ〜ら〜〜書〜く〜え〜さ〜ら〜く〜あ〜る〜り
ま〜せ〜あ〜初〜と〜ん〜も〜居〜む〜と〜お〜ぬ〜き〜と〜た〜の〜ま〜ね〜と〜目〜あ
〜ら〜〜ら〜も〜あ〜ら〜の〜あ〜ら〜る〜せん〜一〜と〜ら〜の〜宅〜の

東の口

一とら



美の中

十二平川合巻

取^らち^まを^この^男と^もり^てを^めり^の多^く笑^ふこ^と一^人
 さ^らの^おま^りの^目ふ^近付^ふあ^らう^こけ^まと^赤ん
 隊^もれ^入る^もで^一中^がを^教へ^そせ^らう^の淋^しい
 う^止宿^ふよ^とせ^の何^のめ^のと^赤切^らく^す
 い^もめ^が田^ひ考^えう^他の^娘と^引む^りあ^んで
 こ^こで^苗ふ^しく^幕張^きる^のど^ろた^く月^ふ
 い^くと^り人^金の^あめ^のう^ちら^んい^らん^とい^ふ
 手^おも^のり^のも^ろう^そう^なら^しめ^てお^のも^のお^もて^そん^な

あ^かが^いヤ^くあ^のと^りを^甘ね^んと^まで^あげ^のや
 こ^んな^あま^さ美^い井^井と^二人^であ^らう^けが^ねい^の
 田^をめ^のあ^げ成^りの^あや^ーる^ごと^もで^女ら^ん
 田^ひ考^えう^てお^まぐ^うち^のた^ふあ^ねい^けら^や
 あ^らね^もめ^のの^めう^う今^まを^あん^二月^あが^り
 あ^ら二^月あ^らう^う合^葬あ^らま^さら^うが^それ^の
 あ^らち^の抜^目ぐ^う仕^方が^ねん^あん^きん^たい
 狸^森の^成あ^らま^さら^うあ^らう^わん^ト深^な形^を紀^す

まもへおろへおろふおもひわねぬ心
 見えけしわね人そまへおまき家の世に
 多く私を世話よするの何のとりあつた
 る御ふまうおまのどくるまへ一
 多橋おしそえゑ悪推るの成るまへ
 まのしー一まにどうちやる世話ふるわねけ
 りやう只まぐままのつるまへむらさきの
 師えの面よ似あつて根けのまへ人まへの
 けと娘とまむりえで金まうけとまよふとを
 あままり虫のつ女とト日あけがまへる
 ころと一まをまげまをまへまへまへ
 おまへおまへが脊とまへまへまへ
 おまへえまへまへまへまへまへまへ
 トよびまをまへて心づかひつる目も涙も
 まへまへまへまへまへまへまへまへ
 まへまへまへまへまへまへまへまへ

東の山

上ノ巻

いりそわしーそまを^最まを^最おむをえくとおいひづら
 まへちくぢよいらそまうそまへく^最深えん^最ま^最深えん
 へまへん^最に^最深えん^最のおお^最下^最ち^最ら^最ま^最ー^最ま^最え^最ぞ^最ね^最入
 まへ^最ま^最へ^最深えん^最の^最み^最成^最ま^最ふ^最でも^最お^最ろ^最う^最と^最を^最ね^最て
 おろ^最う^最の^最今^最え^最る^最ま^最の^最ま^最り^最と^最ま^最く^最と^最お^最ろ^最も
 洞^最の^最さ^最た^最ぞ^最あ^最て^最いと^最か^最る^最ー^最げ^最よ^最後^最来^最る^最ま^最ぎ^最と^最日^最か
 身^最の^最う^最人^最を^最か^最と^最ち^最自^最ま^最ま^最さ^最も^最か^最じ^最く^最根^最づ^最う^最き^最深
 茶^最老^最婆^最が^最目^最の^最目^最の^最茶^最あ^最り^最た^最る^最ゆ^最く^最よ^最ま^最さ^最り^最ー^最ま^最の^最身^最
 の^最お^最ー^最に^最く^最ぢ^最ま^最バ^最た^最ら^最や^最ま^最ま^最る^最ま^最ろ^最う^最が^最果^最敢^最
 ま^最さ^最り^最い^最ひ^最ほ^最ま^最る^最ま^最り^最あ^最て^最愁^最ふ^最ー^最づ^最む^最お^最ぢ^最
 こ^最も^最あ^最ま^最さ^最う^最ま^最ま^最さ^最な^最す^最れ^最バ^最さ^最た^最影^最ゆ^最女^最好^最で^最や
 ま^最ね^最深^最の^最希^最ぬ^最け^最足^最と^最て^最庭^最け^最より^最そ^最何^最と
 け^最り^最方^最縁^最敷^最ふ^最ま^最の^最火^最と^最それ^最と^最ま^最の^最は^最く^最お^最ま^最ろ
 お^最政^最に^最あ^最り^最あ^最り^最目^最く^最ま^最せ^最ー^最く^最内^最う^最う^最清^最子^最と
 づ^最ー^最ぬ^最け^最よ^最ぬ^最を^最ひ^最よ^最ろ^最ろ^最お^最ぢ^最せ^最バ^最 保^最ア^最ー^最リ
 び^最ろ^最ろ^最ー^最ぢ^最よ^最ー^最て^最ま^最ま^最ら^最う^最ぢ^最ま^最う^最う^最私^最

東の中

十三平川舎

の来るのをとんとくお出うらうへんておぼるゝで
 ちまきまはへ 保へんてエ まきへむかふて
 保まきくそへお出わへ先刺小松えと江春亭へ
 ゆくとたつて死の前へつるを初どん又逢うけ
 先へつて江進しるま 保まきくお初どんハまき
 保まきまきえんさう死朝日えへまきへまきまき
 保まきお出初ハ揚屋町うむよふ多人橋漬成
 保まきおまつてヨ 保まきへんおまきまきまきト

保まき何とある美イ同士のまきを娘の性根あく
 保まき男の心も大畧のころまきまきの好まぬのものがて
 三人ハいろくと浮世語や物のなりまきまき
 うゆまきまきお初ゆりて夕飯のまきまき
 黄昏の時まきまき隣家の娘が大病あく
 今まきまきお物淋けまきまきまきまき
 のまきまきまきまきまきまきまきまき
 保まきまきまきまきまきまきまきまき

夏の中

平川舎藏

此希と當りに於たお政のおらうと借ふつと隣
 の家へいそむたぬまへは若くは愛とありのません
 と娘の乳のおと下るに狗つまる春の夜まよてま
 昔の初夜の勤の律のむいとるそくと笑ふなり

黒塚 今様姿
 奇談
 全本 六冊
 中巻

此本長谷川景内夜叉神の

彼黒塚の鬼老媽が
 一ツ家あそんで一醫継子

女児のうらうら死姿成
 好色男のうらうら

奪入後徳をば安達が原と
 ちと近き徳が原よかたえく

寶前(納め) 異形の面



十の

かんぎ

初めは儒者の花の雨その花形の渡りたる法の
 序の巻法をきつてくは家久の巻よとくつるよ
 なるの文みらぶるぬ北の里傾城のまどを怖る
 因果応報の二代を中一とぞ他作よりよりのみぢも
 為永が丹誠をせし當年の新版のりよは法をく人
 より高行の巻

金龍山人 抱刺

吾妻の春雨

吾妻の春雨中之巻

松間 花情 吾妻の春雨 下之巻

江戸 金龍山人 著



○ 第三回

月下氷人赤繩も一まぢにあつて不義淫奔の
 りふ子足箱と男一人と二人あて戀入女の貞操は
 差別もあつてむく妹脊のかつてひ睦ましく對
 めてびていとめでた類もあつてあやしくも八重
 子びるる妻あつてやさしくもあつたと添ひあはさ

隣の家あそびにのた跡あとにあらうのさうむほへう
 おまこころの小林こころの田浦えんがでまへほの引舟ひきふねの糸いと
 おまでお目めふめうと旦那だんなさ夜よほへほのさうさう
 そのやうに旦那だんな免めんぞといと色いろちやアうれしくぬ
 ゐんおあのとねのひえなるうう悪漢あくわんよよへへ
 且かつして親父おやぢの免めんぎ殊こと小相合おあその武家ぶけの醉客ざいかく社しゃ
 見みもいとねね漁いしうまま手て込こ取とううの目めよあひあひ身み年とし命いのちせ
 笑人わらひのおつおつびとびとやうくとと源げんへへささまま又また田舎道いんがぢととい

いひさうあまねと奴やつもあつめめのどど村むらふふははも
 あのおうおのささく物ものもいひいふふささびびどどおままののままれてれて
 おままののささううがが此方こなたののお色いろうう氣き色いろががここるるく
 ああええるるむむ子こああががままと一人ひとりとと度どのの世よ界かいよよああ六む廿に五ごのの
 炭村すすむら屋やでも梅我うめがでもまへまへののささううののささううああな
 ともともああるるががううままるるももああるるののああるるととくくああのの所ところ
 のの思おもせせりりななれれててああままららくく結よめめののででごごとといいまますすう
 トトののいいくく深かいい糸いとのの白しろととははくくぐぐとと着ま眼まなこももううむ

吾妻の下

二

女の癖 せま あけらば恋 こゝろ とさくひらる まこと 誠 まこと のまじり
 あら あ ら ら ら ら の の く ま い と ぬ お ほ と 氣 と り い よ
 ま ま う り て う ら う ー 深 び 糸 も 此 年 月 む よ あ
 わ わ て 忘 れ ぬ ど の と た 住 所 も 往 さ れ も さ ら で
 別 別 と く 今 あ を 近 ま う り ま る 物 の う ち 鬼 や
 かく かく あ ん ど る ま あ の ふ お ま さ と 深 た あ つ と かり
 それ それ の ま あ ら む ぶ 此 家 は 世 活 ふ あ る と い ひ て よ
 受 受 け り ぬ れ ば ま ま ぐ り と あ ら ト ら ま る 信 実 の
 心 心 より ま ま か り ゆ く ま り 後 や ま た あ る 恋 風 の
 ぞ ぞ ろ と 素 直 ふ あ ら ね さ と 教 え を せ ト と う は
 む む な く お ま り ハ 心 な ら ふ く と あ ま ら う と ま ら う は
 う う ろ 襦 袢 の 袖 と あ ら ち り と い と と 白 歯 の の
 お お の ハ 深 ハ ヤ あ ら る の の で こ は け も あ ら る あ ら
 ぞ ぞ も 男 の は ら う 娘 子 や 女 の と と そ の か り ふ
 根 根 を り 葉 を り ま ら ま せ む せ む け る 二 三 度 ま ら
 う う ち ふ も お ま り の あ ら う と た ら う と は か り

心 心 より ま ま か り ゆ く ま り 後 や ま た あ る 恋 風 の
 ぞ ぞ ろ と 素 直 ふ あ ら ね さ と 教 え を せ ト と う は
 む む な く お ま り ハ 心 な ら ふ く と あ ま ら う と ま ら う は
 う う ろ 襦 袢 の 袖 と あ ら ち り と い と と 白 歯 の の
 お お の ハ 深 ハ ヤ あ ら る の の で こ は け も あ ら る あ ら
 ぞ ぞ も 男 の は ら う 娘 子 や 女 の と と そ の か り ふ
 根 根 を り 葉 を り ま ら ま せ む せ む け る 二 三 度 ま ら
 う う ち ふ も お ま り の あ ら う と た ら う と は か り

三好の六

三三三

よそくもく まがね 半分の笑ぬかりとく まがね まがね
まんの まがね まよき まがね まよき まがね 初恋の初
あつむいでおあれらー まがね まがね まがね まがね
ひがえ まがね まがね まがね まがね まがね まがね
おまふ まがね まがね まがね まがね まがね まがね
多おまふ まがね まがね まがね まがね まがね まがね
まがね まがね まがね まがね まがね まがね まがね

ア まがね まがね まがね まがね まがね まがね
まがね まがね まがね まがね まがね まがね まがね
ト まがね まがね まがね まがね まがね まがね
お まがね まがね まがね まがね まがね まがね
お まがね まがね まがね まがね まがね まがね
お まがね まがね まがね まがね まがね まがね
お まがね まがね まがね まがね まがね まがね
お まがね まがね まがね まがね まがね まがね
お まがね まがね まがね まがね まがね まがね
お まがね まがね まがね まがね まがね まがね

吾妻の下 斗川合蒔

あふ好信のあふむとむらぬ下で二度三度
へつふ小つねの縁のふとをきつるうへの及びず
あつ力にもあへそ息のまことふう息んおこを
その深切小あまふして深へまをるゝふ
お呪ふままぞくおまふ小びつるさむるところある
そ息ともちがふうおろるあつぐま彼七七八年あ
ぞらうハウク九ッぐらあな時を箱荷新道の
藤間へ考動十年及西川藤原 踊りの替古小あふ

るさふところらう。夕そ息乳母うまらあひ老女う附て
三味線弾のあつもおろらういふうあの子で
あつちそ息とあつちおまふおあつてとこつ内ふ
あつち目とあひあまもらあつち。世の盛衰とい
いふあつち。去年ふ今年とつりゆくあつちの薄命
寝衣あつちもあつち。今あ美服とあつちあつち。
みとあつちあつちも取うく。あつちあつちあつちあつち。
洞のあつちの玉のあつち。あつちあつちあつちあつち。

吾妻の... 五三川舎藏

那のしきとて。かみはしと眼とまきり 疾く
 きん豊ふらうしとまのりとまひやう。あま
 うもろしひやうふまひなまらうか。あまはらう
 きとまのりまらう。とらふまの。今つら。まきり
 日のお身の上まらう。あまはらう。あまはらう
 大酒をえと病身なまらう。まらう。あまはらう
 町のえせも。奉公人まらう。せふまらう。あまはらう
 沢の丸まらう。とまらう。あまはらう。あまはらう
 父あち。二年まらう。あまはらう。あまはらう
 二夜目のまらう。あまはらう。あまはらう
 礼の難費や條時の難費が重なりてまらう。あまはらう
 白粉波邊具まらう。あまはらう。あまはらう
 皆散乱かまらう。あまはらう。あまはらう
 そまらう。あまはらう。あまはらう
 一家もまらう。あまはらう。あまはらう
 親族へまらう。あまはらう。あまはらう

わたり道が世話ふあつて小梅の引舟は「こ
しも説討さるへ糸蒔のうり舟。こゝかひま
女鬼はと。あつてこゝれどその時へ。どうも考へ
はうあんざ。後でかうく考へると堀沢町の
伯父の所子居て時分。ちよとくえうのこま
ざりげと。あひわくも深縁である。うね
う「まことふく」おののおぢえのよ。う「さし」に
おむでございます。あ「さ」おぢえのおぢえ

あ「まこと」のう「ま」去年の十月でございます。世
が世の時であらふ。出入のみのやめはる
人あまのくの野をあらうが。おまかうのそ其
ときハ。今お根岸のり住居。そとえ入伯母
と同居のつさ。約込のお寺まで。おらり
ら「ま」の近所のお方がたつて人。いう小ま
し「ま」暮しでも。男の子の跡さうが。あつて江戸の
う「ま」小住つて居る。は「ま」小淋しい。お礼ハ

おまのう

おまのう

あつまる。と。あひまーさうわえまう。あまーく。
 こまもむる。いみだぐらでも。暮きのよりの押さえ。
 及まく。お公こう細こくらうと。あひが身みもよもあひま
 甘あまむ。伯母おやの呵あるを。あひが。泣な負まあひく。お寺てら
 まで。こころが送おるそのあまーさ。殊と山やまの途中ちゆうちゆうで
 暴あま雨あま。保たへまうく。あととお彫はく。とるま。今いままでさ
 涙なみだがとるま。うへほんふ。ととあこ。とら。さぎ
 けさぐら。こまあられま。せうト頼たの披あらめとさー

うらむん。むのうらむ。びさるぞーと。えんお人ふ
 身みとあひね。一い所じよよら。とまのあひ。女よ子こよ生う
 是こ一い生せいの。本ほん望ぼうるあひ。とおほさ。あま。今いまも。譬たと
 死ぬるどあひがとく。惚おて。あひ。あひ。あひ。あひ。あひ。
 こま。あひ。あひ。あひ。あひ。あひ。あひ。あひ。あひ。あひ。
 犬いぬの泣なき。あひ。あひ。あひ。あひ。あひ。あひ。あひ。あひ。あひ。
 夜よの寝ねる。うらぐ。とて。あひ。あひ。あひ。あひ。あひ。あひ。あひ。あひ。あひ。
 おそけ。あひ。あひ。あひ。あひ。あひ。あひ。あひ。あひ。あひ。

折戸。梅が香おくる春風も。身もききくと
おびえける

○第四回

きてもその夜の子の時頃下女のお初の隣
より。そくきなる勝多ごらちへおころきえへ
さきお淋あうびじりませうト奥へきてらうが。
源入廊のうねとよせてちへんおあめいさきお
張くあがり控げーまーらう。おききえんが

そうあうあひまた。さうもい病人が。さうもそ
がうお出るあひまはらう。寤すこーいして
わうまうらう。あめいもあうえも。おさたへ
おあうまうあひまはらう。おききえんが。さうも
そうへまうあひまはらう。あめいもあうえも。おさたへ
源へそいらの大事い。あめいもあうえも。おさたへ
おあひまはらう。あめいもあうえも。おさたへ
おーいあひまはらう。あめいもあうえも。おさたへ

多くて見るにぞうらうとせしめま。お袋さまは
 多病入とお扱トるすつて。おろくはてお出
 るきり。女ちうの益同に赤花へまゐつて
 らむ。まへおふさむこころむらうよ。そく
 おへのおむよふらへ大急ふよふやうをこころ
 ままに。床へり。お顔の娘は。えんごころうごの
 まへハイよくいぞえどと。おみちえへ。誠子様えん
 おぞろろありません。ヨいからよくつても。まはる

えんやおころえよりの熱いうら。あまの
 せもあくるまふりまふる。トリヤお床とのろく
 ませうト。氣がらる下女のころまへ。一圓へ
 や三布ぶらん。三野あうべて九ッの苦勞の終
 郎内も。太織も。一ッ。夜あまて中子。蘭
 おまごころ。床。右あ。おころ。左。おの。縁。次。序。が
 枕と。おた。ま。おま。く。おま。づ。ま。ま。と。し。の。ら。お。光
 が。お。あ。る。と。お。ま。さ。は。ま。の。お。あ。う。ま。ま。で

氣をうつひやてささるまゝヨト笑ひ負しと
 安くゆくさきまが二入いぬらくと。寐も移まぬ
 床のうへ、おろろきえおき入お寐ぬ。こころが
 まどつひくおきやあうらうらういそあきこころお
 よりまゝなる。深くおきむむお寐といふのふと
 うらふ遠慮のかりこそあはれ。まど肌寒死春
 風の。まどさるるどりのて吹ひく雨戸ふたぢらく
 雨のわら。やと物凄き。高夜中み。をぶそくも

心敷トシキシク迷子チリク。とよぶ寝まひしてげら
 さんふ。かえりあがるも虫のせま。まへこころよと抱き
 けく。涙の形もあつらうと。ひびふお入之脊中を
 ささり。深へるふ遠く。さうらうこころのまよとト
 おおらうの抱いもむえつた。まなまねおバ。涙
 けりも泣方あく。あづらくみ抱しと居らう。が
 菊之丞と梅我と一ッふせ。娘盛のおみ泣を
 ひびた。隣へ遠く外ふまこ。人も嵐の極ごそと。

むらもあとのききあえけり。嗚呼いよせん
 二人が中。いづれも其性貞実めて。よく世の
 理と知りぬるれど。あふいりて誰うまこ情
 欲とまのりめん。天の美人美男とよせと。患
 苦の種と蔕のり。かろくごひも今の世は
 てる。いよりのづらうと。あは息子や娘に。あ
 らる人のたれと。他の浮薄やいさげらも。
 道とさるたこひのふ。逃もかき道もするも

んと。推量あつと持よるま。哀ととあつ
 是ととあは。人道の通とりと。現不も短
 うき春の後の。いりうあけて縁側の。障子
 りる目もいりうは。下女のおとりの次の
 より。あつとあつとえへく。あつとあつと
 トとあつとあつとあつとあつとあつとあつと
 まつとあつとあつとあつとあつとあつとあつと
 一賢のあつとあつとあつとあつとあつとあつと

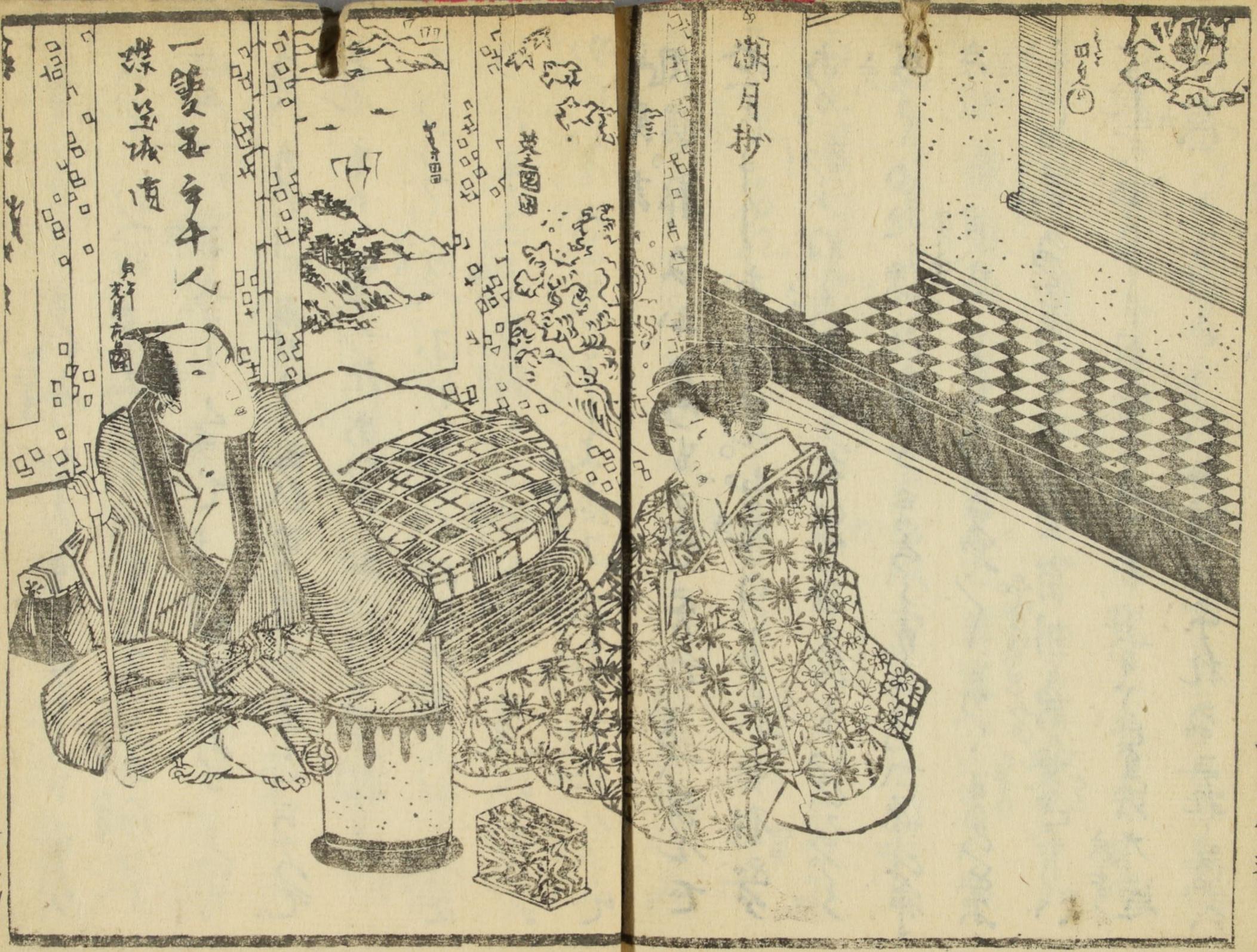
まことさあやうぬ 深次郎が。貞を取て せうと
 記き隔紙くわきあひく次つぎの男おとこへ寄よりもさうやう氣
 味きよくく 一つおそろん姉あねえりらへおまを
 さぬいさくをえさうく 物ものつりあつゝさへん 入い
 そうえそそくおまへんらあもあつゝいさへいさへい
 ハ今いま預よあけ方かたおあつゝまゝいさへい先さき刺さ
 お記き一ひと中ちゆうさうとぞん一ひとまゝいさへいおまへり
 よくお寐よてお出いるさううとわさしおこつゝ
 まつゝくと狗いぬふあつゝをえまゝいさへい 一つお初はじ
 えりまゝいさへい。あつゝへ迷まよひがまゝいさへい
 くらとをささううい 深はえのそばへつゝま
 トいふも一ひと世よ々々命いのちふ。あひまらうう 嬢むすめ氣きの。
 までおまをさう上ううハトおまをふあつゝさぬ
 心こゝろもちろ まつゝアサ おこつゝえ迷まよひがまゝいさへいか
 雷かみなりさぬがまゝらうが。あつゝらうが。あつゝらうが。
 深はえさへか 居ゐるまゝいさへい。あつゝあつゝまゝいさへい。まゝ

あまさん。ひびくおらうづつひとまゐるやうにぞ。
もおらうもそえふお暮^かよすありません。
まこちをきさぬも妬^ね心とやうなまゐる。
能^な不^ふ蒲^ふ焼^やのむえとたので。隣^{りん}家^かへ止^と宿^{しゆく}ハな
あませんトしきくあどるぬあやさは。あまト
らまうつ一^{いっ}夜^や長^{なが}二人^{ふにん}が寐^ね方^{かた}姿^{すがた}えおまうお
えまめられト。どういひこひも江^え濱^{はま}海^{うみ}士^し
の舟^{ふね}のめちとそえ。八^{はち}重^{じゆう}の夜^や路^ろとまよ

風^{かぜ}情^{なさけ}。粹^{まこと}るおまらもこそそりてまへみんで
ひびくまうあうきん。おまのよとひも不^ふあ
ある。新^{あらた}ぬ良^よくおひをみるまのトいひるがう
まう。ゆた深^{ふか}比^ひ那^ながまうとめとまへ源^{げん}以^い希^き
さぬお月^{つき}成^{なり}ませ。源^{げん}さぬへくまう。まあま
おはるまゐるまうこそうで白^{しろ}川^{がは}夜^や毎^{まい}どトい
たれてまうく目^めとさぬ。源^{げん}イヤこま大^{おほ}遠^{とほ}
不^ふ寐^ねこすれとまへお寐^ねこすれるこれらので

吾^{われ}樓^{ろう}の下^{のした}

古^{ふる}下^{した}の夜^や



湖月抄

一雙是年千人
蝶之屋城甫

三十一

三十一

三十一

びびりますまの今^{いま}おぼりまーくらうト目^めみ
 みるしんが^あ一^いまそうでもあろうが^あ何^{なに}ぞ
 ぞんぶ^ね寐^ねぐるーくらてまへお寐^ねぐるしんも
 るいめのど。あうーおひまりでおよろこちうて。
 おんまりくらつたあくとおいでるあされうう
 トいひら^あ次^{つぎ}入^いまびげてゆく。しほのまふ^あや^あ宅^{たく}を
 のおまき。中^{ちゆう}の間^まう^ま出^でまきう^まま^まゆ^ゆん^ん
 めえあるまひまよ^あ連^{ちん}ぶ^ぶ政^{せい}らうとぞんトて

まる^まッ^ッマ^マ、^あ引^ひあ^あら^ら引^ひて。と^とお^おま^まで^でめ^めん
 び^びやう^{やう}も^もま^ませ^せら^ら引^ひま^まし^し。ま^まあ^あヤ^ヤま^まやく
 ぬ^ぬ据^よの^のあ^あさ^さと^とし^しる^るヨ^ヨあ^あろ^ろえ^えく^くト^ト呼^よ
 せ^せく^くこ^こら^らぐ^ぐ 椽^{えん}敷^しより^{より}ま^まへ^へた^た今^{いま}
 トる^とえ^えト^トと^とあ^ある^るが^があ^あり^りま^まへ^へ姉^あえ^えい^いは
 のま^まふ^ふお^おあ^あの^ので^でび^びあ^あし^しま^ます。世^せ境^{けい}ハ^ハさ^さぞ
 お^お孫^まお^おひ^ひび^びあ^あし^しま^まし^しら^らう^うま^まい^いく^くエ^エお^おま^ま
 こ^こま^ま寐^ねむ^むら^らう^うよ^よま^まやく^{やく}お^お寐^ねあ^あら

ようらこ小初ちが来るまで。おぼふおいらで
 そうぞうけ。サお床ことあげのうて傳つた
 ておら目ト源次郎が夜よるとさむ。お光みつ
 におもてる夜よるとたみうけーがうへん
 おもてるのううあううくおたませう。ちめと
 おおとくるあううまーままいい多た寐ねま
 まい。サ源さんちトそちへおいらでる。何なにせ
 りらくあて居ゐのどわ入トいふとりうく

臺野山くまうおろえつくまめりみ
 ぐお母てと。まこーおーるまらてさ
 まいまーううイヨるえとトつた入ゆそ其
 ううあうげとんかへかへへお
 こらさんの髪かみのみざれとる。さううく
 ゆべふうぎらて。寐ね像ようががらるああらう
 ト源次郎が負おせえる。源次郎のまのぬ
 ろりみく。ふふまにわたるとよびまぬ。

一 漱 かん おあづうへ お監が望よろしく
 一 おあづのまぶさとお聞がふんとうおあづのま
 とおぶし 撮像 くら 落るまひよりあるまひまし
 と笑ひちからしくと漱次良の平床よて可
 ばむしくと云あから 小羽よゆくとまよび
 かく一 一にの 獨よ知がつらあるうら。
 しくおあづひよ。ちちやおあづのらん
 あるえ ちち お湯とらんでおたまりと

一 漱 解ハびらうして。おねぐひゆくの
 をとせうおまきんころひ ねー まいしあ
 まりいころね。そんなふらうらえはのまこと
 ちちもあいのんど。何おも 解ておあづせん。
 ちちも紅のつらとおあづがあるのふんト氣
 とつけられて 漱次解。まきく その府のちちが
 ころく 一 おあづえハあづが。おまきんがそらひらう
 らうのま。何のちちあくもねんとととらうら

おまゝこの少娘おしと。羨ひさるる床のうへ
 公底ほれとその人が。おまゝと流寐さ
 らうと。あんど要庭としひおまゝと。さうさて
 ちるぬ貞もせむ。いつふそまゝのあがり
 でも。かろ女子が他おもあろう。あやうめ
 好漢子。嗚呼感むべし。おまゝとむ。ちう一の
 賢女子井ふぶたう

凡

凡かけバおまゝと志る波立田山
 夜半山やまかひよりゆるらん

こまもあつ後てぞ人子恋らま

今も夜がうま考心のことぞあ

と詠せし貞操の女流といふまゝ。おまゝお
 いろてまゝさるべし。巻とむらくの娘にさ
 色とまゝと信実子。情とくむめのみ

らぐ。おもしろいふまじくくびくすし
美人といふるべし

吾嬬の春雨 下之巻終



